
世界を渡るヒト

クコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を渡るヒト

【Nコード】

N77170

【作者名】

クコ

【あらすじ】

この小説は、短編集でできています。
時に違う世界でのお話、時に主人公のお話、時に“この世界”の過去のお話。そして時には残酷なお話。その場合は避けてもかまいません。

はじめに

この話は、短編集のようなものです。
短編がいくつか続き、1つの話になります。
短編と言いつつ、長い場合もあります。

それでは説明します。

基本的に主人公はいますが、
違う子が出たりもします。その場合は、その子はその話の中の主人公
公と思ってください。
時々違う子も登場しますが、その子達も知っていてください。
そして知らなくてもいい子も出ます。簡単に言うと、エキストラで
す。

舞台は、一応“神の世界”というところです。
しかし、主人公は違う世界に旅立ったりします。
そしてその主人公の過去の物語もあります。
さらには“神の世界”の過去についてもあります。

いろんな物語が詰まっています。

く基本主人公く

名前：フウ

性別：女

外見：金髪金眼。髪は腰までのロング。かわいらしい幼い顔立ち

服装：袖のない白いワンピース

手持：肩に掛けているショルダーバッグ・首に下げている小さな水

晶の珠

性質：風

話ごとに年齢が変わっていくので、あえて年齢は書きません。
性質というものは、あとあと分かります。

ネコの世界

ここはネコしか住まないネコだけの世界。そこにはネコ以外誰も出入りできない。

——いや、この世界を出入りする者がただ1人…

「ヤッホー、ルリちゃん！またこっちに遊びに来たよー！！！」

「フウちゃん、また来たの？」

フウという名の少女は実は人間でいう“神”という存在。

神と人間は姿形がそっくりなのだが、フウはまさに人間といえるくらいとてもマイペースだった。

歳は6。だが知識や運動能力は、人間の大人を軽く越せるくらいあった。

金髪金眼の幼い顔立ちに幼いしゃべり方、そして袖の無い白いワンピース。その姿は自由人…否、自由神じゆうしんと言うのにふさわしかった。手持ちは小さなシオルダーバッグと首に下げている小さめの水晶の珠。

“神”というにはあまりに不似合いな神だった。

「ここは本来、僕たちネコしか来てはいけない場所なんだけど…」

「いいのいいの！そんなの気にしない！ボクはルリちゃんたちとも遊びたいんだから♪」

「まったく、あなたって神は…」

神にはもう1つ呼び名があり、“ヒト”と呼ぶこともある。

ルリは白くきれいなオスネコで目が美しい瑠璃色から“ルリ”と呼ばれている。

「今日は何して遊ぶ？」

「今日はダメだよ」

「えー！なんで？」

「今日は僕がここの辺りを見回りする番だから」

ネコの世界は安全だが、もしもというときのため見回りをしなければいけない。

そして今日の見回り当番はルリだった。

「ここは安全なんだから、今日ぐらいさぼってたっていいじゃん」

フウは神とは思えない発言をした。

「か、神様とあるう方が何を言ってるんだ！いつ何時、何が起こるか分からないんだよ！？何かが起こってからでは遅いんだから！」

「うう…わかったよ。でもボクもついてくからね。」

フウは笑いながら言って、ルリの見回りのお手伝いをするようになった。

見回り

このネコの世界は約1kmほどの大きさで、人間なら世界を1周できるといっても小さい世界だった。

フウとルリが見回りをしていると、ほかのネコが声を掛けてくれるとても平和な世界だった。

ちなみにルリは、この世界のリーダー的存在でよく親しまれている。フウもちょうちよくこの世界に遊びに来て、ここのネコたちとはとても仲が良かった。

すると1匹のネコが慌てて2人に向かい走ってつきた。

「そんなに急いでどうしたんだ、チャオ？」

チャオと呼ばれる、茶色のやや小さめのオスネコは、息が切れるぐらい急いできて、呼吸を整えて言った。

「た、大変なんです！」

「大変って何が？」

「い、いいから、ぼくと一緒に来てください！」

「よくわからないけどついていけばいいの？」

「はい！ こっちです！」

チャオはまた走りだした。フウとルリもなんだろうと思いつつ、そのあとについていった。

しばらく走って、チャオが立ち止った。

「ここです」

チャオがついたそこはほかのネコたちも集まっていて、ルリとフウをを待っていたかのように座っていた。

「みんな、どうしたんだ？」

ルリが訊ねると、1匹のメスネコが言った。

「ルリさん、フウさん、これを見てください」

そう言うと、集まっていたネコたちが道を開けた。
2人（1人と1匹）は首をかしげながら、その中心を見た。

「…これは!？」

「何、これ…」

それを見た2人は目を見開いて驚いた。

大きな穴

「いったい何なんだ！？これは！」

「わ、わかりません…」

フウとルリが見たものとは、それはとても大きな穴だった。半径約10mの、ネコたちにとってはとても巨大な穴だった。

「底が見えないね。なんだろこの穴」

フウがその穴に近づいて、しゃがんで中を覗くと、まるで底が見えず、永遠と続きそうな深さだった。

「そんなに近づいては危険です！まだ何かわからないのだから」

チャオが心配して言った。

「“何かわからない”って言うても…これは大きな穴としか言いようがないんじゃないかな？」

「それは、そうですか…」

「昨日までは無かったのか？」

「はい」

ルリはこれが一体どうやって出来たものか、これがこの世界に影響を及ぼすものではないかと考えていた。

真面目に考えているルリに対し、神であるフウは、その穴に興味深々で面白そうに中を覗き込んでいた。

「中は一体どうなってるのかなあ」

「フウちゃん、まさか“この穴の中に入ってみたい！”とか思っているんじゃないだろうね？」

呆れながらルリは訊ねた。

「え？ダメ？」

フウはまるで危機感を感じてないようにしゃがんだまま、ふり返って平然と言った。

「ダ、ダメに決まっているでしょう！――！」

ルリは大声でフウに向かって言った。

「これがまだいたい何なのかわからないのに……。もつとよく考えてから発言をして！

この世界に影響を及ぼしてしまうとか、戻れなくなってしまうとか！そういうこともあるかもしれない！

それを遊び半分で“入ってみよう”だなんて…………。

神であるあなたには危険とを感じるものはないんですか！？」

大声で怒鳴ったルリに周りはいしんとなり、フウは半泣きになっていた。

「うう…わかったよ。わかったからもう怒鳴らないでえ…………」

「わかったならいいです。——みんなもこれにむやみに近づかないこと！」

『はい！』

ルリがネコたちに指示を出していると、フウは「よいしょっ」と立ち上がった。

すると

―ガラッ！

「あ……………」

フウの足場の地面が崩れ、フウは驚くことすらせず、そのまま穴の中に落ちてしまった……

「フ、フウちゃん……！！！」

ちょうどフウが落ちたところに振り向いたルリは、フウを助けることもできず、ただ叫ぶことしかできなかった。

穴の先

「フウちゃーん!!!」

ルリの叫ぶ声が穴の中まで聞こえる。

そして肝心な、穴の中へ落ちてしまったフウはというと、

「あゝあ落っちゃった。うゝん……ボクの力を使えば向こうに戻れるけど、穴の底がどうなっているか知りたいしなあ」

と真つ逆さまに落ちながら腕を組んでそう呟いていた。真面目なルリとはかなり違う気楽な神だった。

「でも底にぶつかったりしたら痛いかなあ？血、出るかな？うゝんどうしようかな？」

……ま、底に当たったら当たったで頭が割れるだけだから別いいか！」

軽くそんな事を言った。“頭が割れるだけ……”それでもかなり大変だと思う。

「……………あれ。いい、のかな？」

——うゝん……でもやっぱり痛いのは困るなあ……………でも穴の底が気に

なる……。

——ま、いつか！死ななければきっと大丈夫さ——！」

頭が割れても、死ななければ大丈夫だと言って、底がどうなっているか調べるため、フウはそのまま落ちていった。
本当は出ようと思えば出ることも可能なのに……。

すると先のほうに光が見えてきた。

「あ、光が見える。この穴、ネコの世界の反対側に繋がっていただけなのかな？」

そう思いながら態勢を整え、フウの性質である“風”を生かし、風をつまく使いスピードを落としながら光の方へと向かっていった。

「お、出た出た」

フウは穴から出ることができた。
しかし油断していたフウは風を消してしまい、結局地上に落ちてしまった。

ドンッ

「いったたゝ。——あれ？ここ、ネコの世界……じゃ、ない？」

フウは辺りを見回した。そこはネコの世界ではなかった。
ネコの世界よりも広い大地、広がる空、そしてさわやかな草原。

「あつれ〜？ここ別の世界？——そういえばどこかで見たことある
ような……」

立ち上がりながらそう呟いていると、

—バシンッ！

「ふぎやつー！」

急に背中を誰かに蹴られ、立ち上がったフウはまた倒れてしまった。

「よっしゃー！ようやく当たったぜー！」

「いつちゃー…ってあれ？ライちゃん？」

フウはまた立ち上がった。

そして蹴った人物をよく見ると、そこには自分がよく知っている人
物が立っていた。

危険世界

「なんでライちゃんがここにいるの？」

“ライちゃん”と呼ばれているのはフウの幼馴染であり、同い年の男の子。名をライラオという。

明るい金髪金眼でフウが“風”であるのに対し、ライラオの性質は“雷”である。

「“なんで” たって・・・」

フウが辺りをよく見ると、そこはフウがよく知っている世界。

「ここってボクらの世界？」

「当たり前じゃないか」

そう、ここはフウの生まれ故郷、いわゆる“神の世界”だった。

「おかしいな、ボクネコの世界に行ってたはずなのに…」

するとライラオはフウに顔を近づけ怒ったように言った。

「フウ！まさかまたあの世界に“入^いったのか”！？」

ライラオに大声で言われたフウは、冷や汗を流しながらも笑ってこまかそうとした。

「あ、あのね、ボクはただルリちゃんたちと遊びたくて、ネコって可愛いから遊びたくってさ。それに癒されるでしょ？だから……」
「いまオレが言ってるのはフウがネコの世界に“入ったか”だろうかだ！」

ライラオは真剣な顔で言って、その顔にフウはどうすることもなく顔を下に向けてコクリと頷いた。

「入った、よ……」

その言葉を聞くと、ライラオは大きくため息をついた。

「はあ……あそこは本来入ってはいけない“危険世界”の1つなんだぞ！わかってるのか！？もし入きすぎたらその世界に何らかの影響があるかもしれない、そう言われただろう！」

危険世界というのは、神であっても、本来入くことを禁じられている世界。

その世界に神が入くことによって、その世界の仕組みが崩れ、影響が出、危険が訪れるかもしれないため、“危険世界”と呼ばれている。

“ネコの世界”は、その数少ない“危険世界”の1つなのである。

「影響が……。…もしかしてっ！！！」

フウは何か思い出したように言った。

「ボクがその危険世界に入りすぎたせいでもう影響が出ているとしたら…あれは！……」

「なにかあつたのか？」

「うん」

フウは今日ネコの世界であったことをライラオに話した。昨日まで無かったという大きな穴のこと。
その穴がここに繋がっていたこと。

「それじゃあフウは——」

ライラオは上を向きながら、空を指さし、

「——あの空から出てきたってことだな？」

「うん。ネコの世界にいたはずなのに穴に落ちてなぜかここに」

フウが言うと、ライラオは顔を戻し、腕を組みながら唸った。

「うーん……やばいな………」

「やっぱり、ボクのせいで影響が………」

渡橋

「ボクのせいで穴ができてしまったらあれはボクが何とかしないと！」

「でも、変だよな？」

「なにが？」

ライラオは何か悩んでいた。

「なんでネコの世界に空いた穴が神の世界と繋がってたんだけ？」

「そういえば・・・」

フウとライラオは悩んだ。そしてフウはある仮設にたどりついた。

「もしかして、あの穴はこの世界とあつちの世界を行き来するためにある、いわば世界を渡るためにある大事な橋みたいなものじゃないの？」

「・・・」

ライラオは空を見上げ、フウを見た。

「かも、しれないな……」

「ネコの世界にはネコしか入ってはいけない。たとえば神だとしても……。そのルールをボクが破ったせいで、世界をつなぐ渡橋^{わたりばし}が穴となり、現実に出てしまった」

「その可能性は高いな。だとしたら早くふさいでやらないと、フウはきつと運よく出られただけでネコの世界のネコたちが間違っ^{まちが}って穴に落ちてしまったらもう出られなくなるかもしれない」

「早くこのことをルリちゃんたちに知らせないと！」

そう言って、フウは首に下げていた水晶の珠を握った。この珠は特別製で、この珠から作られたコピーと連絡を取ることができるのだ。フウは予め、ルリにこの水晶のコピーを渡してあったのだ。

だがそのとき、ライラオの顔はやけに元氣のないものだった。

——ネコの世界

そのころネコの世界のネコたちは、ルリの指示のもと、穴に近づかないようにしていた。

だれもがフウのことを心配していた。そのとき

『……ちゃん…ルリちゃん！ルリちゃん！聞こえる？ルリちゃん！』

「この声は…フウちゃん！！??？」

ネコたちはだれもが驚いた。

ルリはフウからもらった水晶の珠を握り、返事をした。

「もしもし！フウちゃん聞こえるよ！フウちゃんは無事なの？」

『ルリちゃん！よかった、繋がった…。ルリちゃん！その穴にはボク以外誰も落ちてないよね！？』

いつもの声とは違う真剣な声でルリも真剣になった。

「うん！まだ誰も落ちてないよ。なんとかみんなを穴から離れさせてるよ」

『さすがルリちゃん！行動が早いね。——いい？よく聞いてね？』

「うん」

『その穴は神の世界とネコの世界をつなぐ大事なもので、ボクがそっちの世界に入きすぎたせいで現実化してしまった、いわば“渡^{わた}り橋^{はし}”』

「渡橋……」

『そう。それでこれは本来現実化しないもので、ボクがそっちに入きすぎた影響でできてしまったもの。底に落ちるともう出られなくなるかもしれない』

「大丈夫。誰も落ちてないから」

『うん。——でもそれだけじゃない。放っておくとまた違う影響がそっちに出るかもしれない』

「そ、そんな・・・」

ネコたちは水晶から聞こえる2人を会話を聞き、怯え出し、いったいどうなってしまうのかと不安になった。

『大丈夫！ボクが守るから』

「えっ…！？でも、どうやって！」

『・・・・・・』

フウはしばらく間をおいた。

『ボクがこの世界とそっちの世界を結ぶ渡橋を切り離して、そっちを自由にする。それできつと渡橋になっているその穴は無くなるはずだよ』

「そ、そんなこと！できるの！？」

『ボクを誰だと思ってるの？ボクはすべての生き物を守り、安全を

約束する神であるぞ！』

フウは笑って言った。

「フウちゃん……」

『それじゃあ始めるよ』

「……お願いします！」

そう言ったが、そのときルリはとても悲しい気持ちになっていた。

（フウちゃん……）

守りたいから

——神の世界

「よし、いつちよやるか！」

そう言うとフウは、ショルダーバッグの中から1mほどの大きく、肉厚な剣を出した。

その剣はとてもきれいな金色の色をしていた。

「この剣に斬れないものはないんだから！」

フウは笑いながら言ったが、ライラオは暗い顔になっていた。

「ライちゃんどうしたの？顔が暗いよ？」

「わかつているのか？」

ライラオの言葉にフウはきよとした。

「それで世界の繋ぎを切り離してしまったら……」

ライラオは言うのをためらった。しかし齒を食いしばって言った。

「切り離したら、お前はもう!...!」

“ネコの世界に行けなくなる”でしょ?」

ライラオは驚いた。フウはちゃんとそのことを知って実行しようとしていたのだから。

「知ってるよ。それでもボクはあの子達を救いたい。それだけだよ。ボクの、いや…私のせいでルリ達に被害が遭うのなら!私が守ってやらないでどうする?これは私の責任。責任はちゃんととらないとな」

「ほかに、方法があるかも!」

「考える余裕はない。こうしている間にも向こうに影響が出てしまっているかもしれない」

ライラオは泣いていた。本来いつもフウが泣くのにそれを我慢して、フウが泣かないから。フウにとって、それだけ友達が大事なのだ。それだけ、友達を守りたいのだ…。

「それじゃあ行ってくる!」

そう言うとフウは風を使い飛び立った。十分、空に上がると、ぽっかりと空いた大きな穴が見えた。

「やっぱり高いな」

フウは目をつぶりながら大きく深呼吸をした。
そして、目をぱっと開け、

「我が望むその橋をこの剣で断ち切り、繋がりし世界を自由に！！」
「！」

そう叫ぶと、剣からはとてつもなく大きな輝かしい光が溢れだし、
フウは1回剣を思い切り振った。

そして、剣で穴を斬るとフウはそのまま落ちていった――

「……おい！大丈夫か？フウ！」

「あれ？ライちゃん？」

「やっと目え覚めたか」

フウは立ち上がった。どうやらフウが落ちた時にライラオが受け止めてくれたようだ。
剣もすぐそこにあった。

「ボクは何を…あつ！穴は！？どうなったの？ちゃんと無くなった？」
「？」

フウはライラオの肩を掴み、ゆすって言った。

「あ、ああ、大丈夫。穴は無くなった。」

「ホント!？」

それを聞くとフウは手を離ししゃがみこんでしまった。

「そっか、これで大丈夫。だい、じょう…ぶ……うつ…ひつぐ…うわああああん!!!!」

安心するとともにフウはそのまま大声をあげて泣き出した。

フウはずっと泣き続けた。気が済むまで、ライラオもずっとそばにいてくれていた。

ネコの世界もちゃんと無事だった。ルリやほかのネコ達も泣いていた。

もうフウは来ることができないと知っていたのだろう。

しかしどっちの世界も影響は出なくなった。

それからフウは手紙を書くようになった。届きもしない手紙をネコ達に向けて・・・

——ネコの世界のみんなへ——

みなさんお元気ですか？

お怪我はしてないですか？

みんな仲良くしていますか？

ボクはその世界がいつまでも平和であることを祈っています。

ボクは君達のことを絶対、忘れたりはいしません。

だから、ボクのことを覚えてください。

もし、この願いが叶うなら…祈るだけで、思うだけで届くなら、

また、会えたらいいね……

——フウ——

名もなき龍と小さな村

それは何百年も前のこと。

そこには小さな村があり、名もなき美しき龍と人々が住んでいた。

龍は、ここに住む人々と村を守り続けていた。

自分の力を誰かの役に立つために使いたいという、優しい心を持つ龍であった。

人々はその龍を神様のようなすばらしきお方、「龍神様」と呼びたたえていた。

あるとき日差しが強ければ、雲を呼び寄せ、温かいひだまりを。

あるとき強い嵐が訪れば、風を呼び、雲を追いつ出し、程よい恵みの雨に。

どんないかなる災害も龍が食い止め、その村にはいつも平和な日々が続いていた。

ある日、その村の空高くに大きな闇が覆いかぶさった。

辺りは暗くなり、木々の生命力は闇に吸いこまれて緑は次第に枯れていった。

人々は、これはさすがの龍神様でも防ぐことはできないとあきらめていた。

しかし龍は人々に言った。

「大丈夫！私が絶対にあなたたちも、この村も自然も救います！たとえこの身が滅ぼうとも、私のありったけの力を使います。だからみなさんは家の中に入って待っていてください。必ず私が守ります！どうか私を信じてください」

人々は龍の心強い言葉を聞き、龍を信じようとした。

「龍神様お願いします。どうか私たちをお救いください！」

人々は龍を信じ、救ってくれと頼んだ。

「私に任せてください」

そう龍は言って空へと飛び立った。
闇の中心部へと向かって――

龍と闇

闇の中へ入った龍は思いっきり力を出した。

（絶対のこの人たちを守るんだ！！！！）

龍の身体から光が満ち溢れ、龍の周りの闇は光に消されていった。しかし、闇のほうが多く、龍の力でもまるで歯が立たなかった。

それどころか、闇は手のように変形させ龍の身体をつかんできたのだ。すると、闇は龍の身体をどんどん引き千切っていった。

闇は光に近づきすぎ、自ら自滅するように消えていったのだが、それと同時に龍の身体の一部も次々に闇に持って行かれ、消えてなくなってしまった。

それでも龍はあきらめなかった。龍は苦しみながらも闇と闘った。

自分の身が滅ぶとも、この身体がすべて闇に持って行かれたとしても、龍は人々のためなら自分はどうなってもいいと、強く優しい心を持っていた。

人々は家の中で龍を信じ、闇が去ることを祈り続けた。

何時間経っただろうか、闇は徐々に薄くなり、残り少なくなってきた。

龍は、自分の力だってもうほとんど残っていないはずなのに、力を出し続けた。

（あと少しなんだ！もう少しもってくれ・・・！）

空は晴れてきて、闇はすっかり無くなった。

（ハア、ハア……。これで…みんな、大丈夫なはず……）

龍は疲れ果てながらも地上に降りた。

（なんだ？動きにくい……）

足を付けると、バランスがうまくとれず、立つのでやっとだった。龍はきつと力を使い過ぎてしまったんだろうとふらつきながら思った。

すると、龍は人々に聞こえるように言った。

「ミナサン、闇ハモウ去リマシタ！モウ大丈夫デス！」

（あれ？声がおかしい？……）

龍の声はガラガラで、その声はとても悲惨で醜いものだった。これも力を使いすぎた影響なのだろうと思った。

そしてしばらくし、龍はある異変に気付いた。

闇はもう消えたのに人々はまだ家から出てこなかったのだ…。

化け物

（どうしてみんな出てこないのだろうか？）

龍はそう思つて辺りを見回した。

すると一軒の家から子供が出てきてこう叫んだのだった。

「ここは僕たち人間と、龍神様の住むところだ！お前みたいな化け物とつとここから出てけ！！！」

子供は近くにあつた小石を龍に投げつけた。

（私が、化け物！？）

子は敵意を示した目で龍を睨めつけていた。

龍は自分を見てようやく気づいた。人々が出てこなかったのも、子供が自分に小石を投げたのも。

見たら龍の姿はどこにもなく、代わりに化け物のように醜い自分がいた。

闇に自分の身体を引き千切られたせいで、身体は三分の一もなくなつてしまい、足や腕もひん曲がり、声までも醜くなつてしまったのだ。

もうこれは“化け物”としか言いようがなかった。

龍は…否、化け物は気づいた。

人々が出てこなかったのはこんな身体になってしまった自分において出てこなかったことを。

化け物は知った。

自分がこの村にいては人々を怖がらせてしまうことを。

そして人々を怖がらせないようにするためには、自分がここから出ていかなければいけないことを…

すると、次々に人が出て来、龍に向かって石や棒切れなどをぶつけた。

闇に体を引き千切られた時より痛くないが、化け物にとっては人々の思いがとても痛かった。

（この村はもう、自分がいなくても大丈夫だろう…きっとこの村だけでなんとかしていける。私はそれを信じよう…。怖がらせないため、私はここから立ち去ろう……………）

そう村人達を信じ、化け物は涙を流しながら村から出た。

慣れない身体で飛べなかった上、力がほとんど残っていないため歩いて。

化け物は誰かを怖がらせないため、誰も、生き物もない森の奥深くへと向かった。

しかし化け物は気づいていなかった。

誰かを怖がらせたくないという思いは、生き物のためを思う龍だった時と同じ、とても優しい心であったことを。

姿形が化け物になっても、心はもとの龍のようにとっても優しく、美しいものであった。

化け物は疲れながらも歩き続け、誰もいない、暗く深い森に来た。
化け物はここで一生住むことになった。

そして、何百年もたったある日、
化け物はこの森に誰かが来る気配
を感じた・・・

名のある神、名もなき龍

（間違いない！誰かが来ている！でもなぜ…？　もしや、私を胎児するため…！？）

そう思った化け物は気配を消してなるべく化け物を感じ取った気配から遠くへ離れた。

しかし、その気配は化け物のところへとまっすぐに進んでいる。

化け物は木の陰に隠れ、もっと集中して気配を消した。なるべく見つからないように。

「あれ…？おかしいな。あの気配消えちゃった・・・」

化け物を感じ取った気配の正体は2歳ぐらいの小さな女の子だった。

（あんな子供がなぜここに？　それに、この気配は本当にあの子供のものなのか？）

薄々感じていたが、化け物を感じ取っていた気配は人間のように人間ではない、変わった気配だったのだ。

化け物がそう思っていると、

「あれ？その木の陰に隠れているのはだあれ？出ておいで」

少女に見つかってしまった。

だが、化け物は怖がらせたくないため出てこようとはしなかった。すると少女は木の方へ一歩ずつ近づいてきた。

少女が木の前まで来ると化け物は隠れるのをあきらめ姿を現した。

少女は一瞬驚いたような顔をしたが、

「なんだ君だったのか。ボクはフウだよ。よろしくね」

フウという名の少女は逃げようとも怖がろうともせず、化け物に向かい微笑んだ。

化け物はその行為に驚いた。

「ナゼ逃ゲナイ？ナゼ怖ガラナイ？コンナ醜イ姿ヲ見テ…一体ナゼ……？」

フウはきよとした。しかしまた笑って言った。

「どうして逃げなきゃいけないの？どうして怖がらなきゃいけないの？なんで君の姿を見てボクが君のことを醜いと思わなきゃいけないの？」

フウは逆に化け物が言ったことに対し、訊ねてきた。そしてフウはまっすぐ化け物を見て、化け物の身体にやさしく触れ

た。とても温かい手だった。

「姿形がどうであれ、君にはこのとってもきれいな心があるじゃない。ボクは君のその心が好きだよ。誰かを思う、その気持ち……。あなたはとっても立派な“龍”だよ」

「エッ……」

化け物……否、“龍”は言葉をもらし、そしてポロポロと涙を流し、泣いた。

フウの言葉に救われたような気がした。

どんなにうれしかったことか……。
どんなにその言葉を欲したか……。
こんな姿になってもだれかに認めてもらいたかった……。
いままで誰かを救ってきた自分を、今度は逆に誰かに救ってほしかった……

そんな夢でしかなかった願いがフウによって叶ったのだ。
龍はフウを抱きしめて泣きながら感謝の言葉を繰り返した。

「アリガトウ……アリガトウ……アリガトウ……」

フウは龍を優しく抱きしめ返した。

満足した龍はフウから手を離した。

そして、このとき龍はまだ気付いていなかったが、龍の身体は元に戻っていた。

「ありがとうございます。おかげで救われました。でも、なぜあなたのような小さい子供がこんな所に？」

「えーと……ボクはね、君みたいな子を探してたんだよ」

「私……ですか？」

「うん！ボクはね、つらい思い、苦しい思いをしている子を助けたかったんだ。…それが、神の役目っていうのもあるけど…」

フウは苦笑した。だが、龍はある言葉に着目した。

「“神”って…あなたみたいな小さい子供が！？」

「え、まあ。あ、信じられないなら、信じなくてもいいから」

そう言ったが、龍はフウが嘘をついているように見えなかったため信じた。

それに、これなら気配が人間のものと違うという説明がつくから。

そして、フウはにっこりと笑って言った。

「神の役目は、生きている者たちを守り、安全を保証すること。ボクは、君を守りたい。だから、一緒に来てほしい。ボくら神がすむ、“神の世界”に」

「わ、私なんか!?」

「うん！ボクが絶対守るから！」

フウは明るく真剣な目をし、手を差し伸べた。
龍はその手を取り、フウと一緒に過ごすことになった。

そして、龍はもう一つあることを思い出した。

（自分には…名前が無いんだ……）

神と呼ばれた者には名前がある。
だが、龍には名前が無い。

「そういえば君、名前無いの？帰ったらボクが名前を付けてあげる
ね」

フウは龍の心を悟ったのか、そう言って微笑んだ。
龍は一瞬驚いたが、すぐに言った。

—ありがとう

—いつしか、「龍神様」と呼ばれ、名が無かったこの龍
—名前が与えられるという嬉しさは
—いまも、これからも、一生忘れないだろう

過去の出来事

それは、何年も前のお話。

そこに小さな女の子がいた。

その子の母は、子を産んだ代わりに亡くなってしまった。

父は、その子が生まれるずっと前からいなかった。

そのせいか、子は心を閉ざし、周囲から“冷酷”など言われるようになってしまった。

子は、“冷酷”というのにふさわしかった。

その子には表情がなかった。まるで死んでいるかのような絶望しているかのようなうつろな目。表情が無ければ、笑うことなどなく、あまりしゃべることもなかった。

誰とも接そうとはしなく、家に閉じこもっていた。

子の家はとても大きく、世話をしてくれる者達が一緒に住んでいた。入ってすぐは大広間。その正面にはとても長い階段があった。その階段を上ってやっとのことだどり着く部屋が、冷酷な子の部屋だった。

子は部屋に閉じこもってはいたが、ほんの時々だけ、外へ出ようとした。

だが、いつもすぐに家に戻ってきてしまうのだった。

外の景色を見るために、一番上に部屋を造ったのかもしれないという。

子の世話をやっている者で、一番子のことをよく想っているのが“セリル”という女だった。

子はセリル達にもあまりしゃべるようなことはしなかった。それでもセリル達は、とても子のことを心配していた。

——この冷酷の子を、風の神、名を“フウ”という
——フウは周囲から“冷酷のフウ”と呼ばれていた

——これは、フウが昔“冷酷”と呼ばれていた頃のお話……

不幸を持つ“冷酷”

あるとき、フウはある事が発端で、今度は自分の部屋に閉じこもり、セリル達にも会おうとしなくなってしまった。

そのある事とは、フウに取り付く“不幸”である。

フウが通った後に誰かが通ると、必ずと言っていいほどいつも、不幸が訪れたのだ。

ときには、フウが通ったところで誰かが通り、そのすぐ近くにあった花瓶が落ち、切り傷をしたことがある。

ときには、その者が階段を上がっていても、フウと交わした途端に足を踏み外し、階段から転げ落ちてしまったこともあった。

フウはは自分に取り付く不幸のせいで誰かを傷つけてしまっている
と思い、ずっと部屋の中で過ごすようになった。

——私のせいで誰かが傷つくのなら、私は“冷酷”でいい！私はひとりでもいい！——

セリル達はずっと部屋に引き込みっぱなしのフウのことを余計に心配し、毎日部屋に行って出てくるようにと言うのだが、それでも出てはこなかった。

フウはなるべくみんなに近づきたくないがためか、ドアの前に貼り紙を貼っていた。

だんだんみんなはフウに会いに行ったほうが、フウの迷惑になるのではと思い始め、行かなくなってしまった。

たった一人を除いて・・・

ある朝、いつものようにその者はフウに会いに来た。
やはりドアの前には貼り紙があった。

『今日もあれは出てないから心配はいらない。
はやくここから立ち去らないと不幸が訪れるよ?』

とても短い内容だった。それでも毎日書いてくれて、その者——セ
リルは嬉しかった。

“雷”の子

セリルは貼り紙を見て、フウに聞こえるように言った。

「おはようございます。今日も出ていないんですね？それは良かったです。」

今日はお客が来ますよ。フウ様と同年で“雷”です。よろしければ、お会いになってください。それでは私はもう行きますね。もうすぐ来ると思うので。

……それともうひとつ。誕生日、おめでとunggございます」

今日はフウの誕生日だった。今日で1歳になる。そしてこれから来る、“雷”の子供も今日が誕生日で1歳であった。

（私と同年…そして“雷”か・・・）

「おはようございまーす！ “ライラオ” といいまーす。父様に言われて来ましたー！」

ライラオという少年が来ると、フウの世話係が集まってお出迎えをした。もちろん、セシルもいた。

「ようこそ、ライラオ様。誕生日おめでとーございます」

「ありがとう！父様に言われてきたんだけど、フウって言う子いる？その子に会いに来たんだけど」

そうライラオが言うと、辺りは静まり返った。

しかし、その中でセリルはライラオに向かい、笑って言った。

「わざわざありがとうございます。それでは私が案内いたします」

「よろしくおねがいします」

ライラオは返事をし、ニコツと笑った。

セリルはライラオを案内するため、階段のところまで歩くと、そこにはフウが立っていた。

その姿にみんな驚いた。

「やっと...やっと、部屋から出てきてくださったのですね」

セリルは涙を流した。フウが部屋から出てきてくれたことがとてもうれしかったのだ。

するとライラオはフウの真ん前にきて自己紹介をした。

「よう！オレ、ライラオっていうんだ。よろしくな！」

ライラオがそう言って手を差し伸べると、フウはその手に触れまいと離れ、一段上がった。

「か、勘違いするな！私は雷の子に忠告をしに下りてきたただけ！私に近寄ると不幸が訪れるから近づかないこと！」

そう怒鳴って言うと、フウは階段を上っていった。

ライラオは一瞬固まってしまったが、ハッと我に返り、フウのあとを追いかけた。

「ちょ！待てよ！それだけか！？」

フウはライラオの声を聞かぬよう返事もせぬまま階段を上っていった。

ライラオはイラつきだし、なるべく速く階段を上りフウに追いついたところでフウの腕をつかんだ。

「やっとつかまえた！」

フウは驚いて目を開き、後ろを振り返って叫んだ。

「わ、私に触れるなアア！！！！」

フウはそう言うときライオオの手を思いっきり払いおとした。
すると、2人は互いの目を見合い、言葉を漏らした。

『えっ……………？』

バタッ、ドタッ、バゴッ、ドシッ……

「そ、そんな……………！！」

ライオオは階段から転げ落ちた。

しかも今回は段数が多かったため、ひどいケガを負ってしまった。

ライオオの周りにヒトが集まっているのが見え、大量出血しているところも見えた。

フウは怖くなり、走って自分の部屋へと駆け込んだ。

——私のせいで、また傷つけてしまった……私のせいで……！——

傷つけたくない…

ライラオが階段から落ち、けがを治そうとセリル達は急いで駆けつけた。

そして、＜再生＞という力で治療をした。

治療をするのが早かったおかげで、ライラオのけがは治り、血もおさまっていた。

「あゝ痛かった。せめて詫びるぐらいのことはしてほしかったなあ…」

セリルはフウの代わりに詫びるというように泣き泣き謝った。

「ごめんなさい、ライラオ様。このセリルがあの子の代わりに謝ります。ですから許してあげてください。根はとてもいい子なんです…」

ライラオはそんなセリルを見て怒る気も失せた。ライラオは笑って言った。

「まあ、今回はただの事故だし、あいつのせいじゃないからな。それに、確かにあいつ自身もこんな目にあわせようと思っていたみたいだな。」

——ところで、この階段を上っていけばあいつの部屋があるのか？」

「はい。この階段をずっと上って行けば・・・まさか！会いに行こうとお考えで！？」

「そうだけど？」

セリルとはさつきとは逆に冷に会わせたくないと言論をした。

「いけません！私は確か部屋から出てもらえるようにと、ライラオ様を連れて行こうと思いました。

しかし！ライラオ様が近づいて不幸が訪れれば、またフウ様はさらに心を傷つけてしまいます！
行っではいけません！」

セリルの必死な言葉に一同は黙った。セリルはずっと涙を流していた。

フウには部屋から出てきてほしい。
でも、そうして誰かが傷つけば自分のせいだと、また心を傷つけ、フウが壊れてしまう。

それならば、やはりフウのことは放っておくことしか自分にはできないのだとセリルは思ったのだ。
こうすることしかできない自分の情けなさ、フウを一生ひとりぼっちにしてしまうフウの悲しさを、セリルは涙にして流した。

ライラオは笑って言った。

「大丈夫！絶対オレが助け出す！約束する！オレは＜雷＞の特別代表者候補だ。嘘は絶対につかない！」

「だから、もう泣くのはやめなよ。その顔をあいつが見れば、それも自分自身のせいだとまた心を痛めてしまっんじゃないかな」

ライラオの正しく、そして優しい言葉にセリルは泣きやんだ。

そして思った。まだ1歳にしかならないこの方でも、れっきとした＜特別代表者＞と呼ばれる“候補”なのだと。

“特別代表者”というのは、各性質の神の、代表的存在。ライラオは“雷”の候補なのだ。

「お願いです、あの子を…フウ様を助けてあげてください…！」

「ああ！」

ひとり

「はア…はア……。ちくしょう、長すぎだ…この階段……」

ライラオはとてつもなく長い階段に苦戦していた。

「でも、フウのためだからな。がんばらないとな！

——それに、あいつにはやっぱり笑顔の方が似合いそうだからな！」

ライラオはにやにやしていた。これが“一目惚れ”というやつなのだろう。

——フウの部屋の前

「ふう、やつと着いた…」

ライラオは深呼吸をして呼吸を整えた。

ライラオがドアに手をかけるとドアが少し開き、声が聞こえた。

「……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい………」

フウの泣きながら謝っている声。それはとても辛そうにライラオは感じた。

ガチャ

ライラオは思い切って、ゆっくりとドアを開けた。フウはベッドの上でうずくまっていた。

いきなりドアが開いてライラオが入ってきたものだから、フウはびっくりして毛布をかぶった。

そしてフウは毛布をかぶったままライラオに向かって叫んだ。

「なぜ来た！さっき知っただろう？私に近づくと不幸が訪れる！さ

つさとここから出ていけ！！！」

そんな言葉はライラオは気にせず、フウのベッドへ近づいた。
そして布団をとり、フウを抱きしめた。

「な、何を……！！？」

「オレは不幸なんて気にしない。おまえの世話をしてくれている神^{キト}達だってそうだ。誰もおまえを責めていない。誰もおまえのせいだなんて思っていない。

だから……だから、出てこいよ。おまえに“冷酷”なんて似合わない。泣いて、笑って、表情があつたほうが絶対似合う。

じゃないと……一生、おまえはひとりぼっちになっちまう……」

ライラオはなんとかフウを説得しようとした。だが、フウはライラオを突き放して叫んだ。

「私に表情なんていらない！私は“冷酷”でいい！私は一生ひとりでもいい！私はずっと孤独に生きていく！私はそれでいい！！！」

「本当に……！！？」

ライラオの逆に怒ったような声にフウは驚いた。だがフウは答えた。

「あ、ああ！私はずっとひとりでいい！」
「ウソだな……！」

そのときのライラオの眼は、とても真剣なものだった。

本当の心

ライラオのキンとする叫び声でさすがのフウも黙ってしまった。
なにより、ライラオはとても真剣な顔、真剣な眼でフウを見つめていたから。

「じゃあ、なんでそんなに悲しそうなんだよ！なんで辛そうにしているんだよ！！！本当はさびしいんだろ！？ひとりぼっちが嫌なんだろ！？孤独はともつらいだろ！！？」

なあ、おまえの正直な気持ちを教えてくれよ…おまえは本当の気持ちを隠している……。心の中で、ひとりで泣いている…。フウは…
フウは、そんなんじゃないだめだ……！！！」

ライラオはいつの間にか自分が泣いてしまっていた。
するとフウは涙を頬につたわせながら言った。

「私だって、私だって本当は嫌だった！でも、もう無理だ……最初
は本当にひとりでいたほうがいいと思った…。」

でも、だんだんひとりが嫌になった……ひとりが怖くなったんだ！！
だから、外に出ようともした。だけど、外の者たちは私のことを“
冷酷”と呼んで、私は外に出られなくなった。ならいっそ冷酷に生
きていくと決めたんだ……

でも今度は私に不幸が取り付いているせいで、もう……本当に誰に
も近づけなくなってしまった………」

フウは少し間をあけて、大声で言った。

「私のせいで誰かが傷つくぐらいなら！私は誰にも近づかない！私は一生ひとりでかまわない！それが…それがみんなのためなんだ！」

そう言った途端、ライラオはまたフウをギュッと抱きました。今度はさっきより強くて、痛いような気もした。

「それが、おまえの本当の気持か。やっぱりひとりが嫌だったんだな…。」

大丈夫、オレがついている…だから安心しろよ。さっきも言っただろ？みんなおまえのせいだなんて思ってない。逆に、みんなフウのことを心配してるぜ？

迷惑になるからって部屋に閉じこもっているから、みんなフウのことを心配してんだ。心配なんてさせるなよ。みんな待ってるから…」

フウはライラオを抱きしめ返した。それはまるで自分を助けてくれるとも言つかのように…

「みんな、私のせいと思ってないのか？私は逆にみんなに心配をかけてしまっているのか？

…私はどうすればいいんだ？私はどうすればみんなに心配かけなくて済むんだ…？」

問いかけるように言うフウに、ライラオは優しく言った。

「簡単なことだ。こんなところに閉じこもってないで、みんなの前に出て笑うんだ。おまえの元気な姿をみんなに見せてやれ。“冷酷”になんかなるな……」

「……うつ……うわああああん！……」

フウは大声で泣き出した。それは下の階まで届くぐらい。初めてこんなにも泣いた。これがフウの本当の心なのだ…

ライラオはずっとそばにいた。フウの気が済むまで、ずっとそばにいた。

しばらく泣いて、フウは落ち着いて言った。その時のフウにはちゃんと表情があった。

「ごめんなさい。そしてありがとう。あなたは私の恩人だね」

「や、やめろよ。照れるじゃないか……」

ライラオは頬を赤くして頭を掻いた。そんな姿を見たフウはクスクスと笑った。

「おっ！その顔いいじゃん。やっぱりフウには冷酷で表情が無いより、いまみたいに表情があって、笑ったり泣いたりしたほうが絶対似合うよ！」

フウは少し照れた。ライラオはフウに手を差し出した。

「そんじゃあ改めて、オレはライラオ。今日からオレ達は友達だ！よろしくなフウ！」

フウは今度はちゃんとその手を握りしめた。そして笑って言った。

「よろしくね！ライラオ・・・さん・・・」

フウはあまり誰かの名前など言ったことなかったもので、なんて言えはいいかわからなかった。

「ん？オレの名前が呼びにくいか？そんじゃあ…“ライちゃん”とでも呼んでくれよ、そっちのほうが呼びやすいし、親近感がわくだろ！」

「うん！よろしくライちゃん！」

フウとライラオは部屋から出て、階段を下りた。

大広間には、フウの世話係の者達がみんな集まっていた。

『おかえりなさい！フウ様！』

みんなが声をそろえて言うと、フウは少し驚いたが、みんなに届くように言った。

「ただいま！みんな！」

フウは笑って言った。そのフウの顔が嬉しかったのか、みんな泣いてしまった。

そしてフウとライラオは外に出た。

「外ってこんなに気持ちのいいところだったんだ！」

「ああ！とってもいいところだろ！」

「うん！とっても！」

——それからフウは二度と“冷酷”などと呼ばれなくなった

——それどころか、神の中で一番“笑顔”が似合う神になったのだ
った

——それはいまでも、

——きつと、これから・・・

はじめに＋注意事項

この“あやまちの森”という話は、けっこう残酷描写が出てくるので、

そういう系が苦手な人は、読まないことをお勧めとします。

フウちゃんが出るのは「エピソード」だけですので、
『残酷描写なんてへっちゃらだー！』と言う人だけ、読んだ方がいいです。

この話に出てくる人物達は、あまり関係ない事なので、
それでも読んでも大丈夫と言う人だけ、読んでください。

この話は、『きっとこういう世界もあるんじゃないか？』と思った、
私自身の自己満足的な話なのです。
そして、こういう世界があれば、『罪』とか言うものが無くなるの
ではないかと思った、
自己満足なお話です。

読むか読まないか、自身で決めてください。

読む際には、十分な心の準備をしてください。（準備しなくても平
気な人はいいです）

ブローグ

——さて、ここがどこなのか……？——

——人間なんかにはわからないだろうなア……——

——クックック……——

——ここに来たければ来るがいい——

——この“絶望の地”へ……——

ここは森

生き物すらいなく、静かで何にもない森

ここは森

静かすぎて、不気味な森

ここは森

深く暗く、太陽すら見えない森

ここは森

月明かりも星の瞬きも、“^{あかり}光”というものが無い森

——さあ、次にここに迷い込んでくるのはどちら様？クッククク・
・——

『罪』を犯した女、『罰』を受けた迷い子（前書き）

タイトルの『迷い子』は、
“迷子”ではなく、“迷い子”と読みます。

『罪』を犯した女、『罰』を受けた迷い子

…ここは、どこなのだろう…

…なんで私はここにいるんだっけ？
あれ？

何にも覚えてないや・・・

…“ワタシ”って誰だっけ？…

こんな暗くて気味の悪い森に、何の用があってここにいるんだろう…

ここはどこなの？

ワタシはひとりなの？

ひとりぼっちなの？…

なんで私の服こんなに汚れているんだろう
なんでこんなに“真っ赤”なんだろう・・・

…もしかして、私は何かを犯したのだろうか？…
私は『罪』を背負っている？

…そうか、それならきつとこれは『罰』なんだな…

私がここに来たのは、何かを犯したからなんだ…
コレはきつと『罰』なんだ…

そういえば…ひとつだけ、覚えていることがあった
たしか最後に、“風”の音が聞こえたような気が…
私は“風”に連れられたのだろうか………？

あるのは“絶望”

何時間歩いたかな…

歩いても、歩いても景色が変わらない…

こんなところ初めてだ

いや、

何にも覚えていないんだから、それは仕方のないことかもしれない…

いまは何時だろう？

太陽が見えない

いまは何時だろう？

月明かりさえ見えない…

明かりがない…

この森は“光”だって通さないのか…

やっぱり私は『罪』を犯してここにいるのか？

だから希望である“光”を通さないのか…？

ここには“絶望”しかないのか…？

私は『あやまち』を犯したのか？

なんの『あやまち』だろう…

なんの『罪』だろう…

そっだ、この森に名前をつけよう
あやまちを犯した者だけが訪れる
“絶望” しかないこの地、
“あやまちの森”と…

知りたくて、知りたくなくて…

何日経っただろう…

昔のことを思い出そうとして
がんばっても思い出せない…

——いや、違う気がする
思い出したくないんだと思う

——それは、私が何かを犯した証拠なのか？

私は誰かなのか…

最近はそんなこと気にしなくなってきた

何かおかしくなってきたような感じがする…
頭が混乱している…

この森にいるせい？

私のせい？

私が誰かに“手をかけた”せい？？

自分の『罪』が知りたい

自分の『あやまち』が知りたい

でも、

知りたくない…

—なんで？

知ることが怖いの？
どうして怖がるの？

ときどき…

ほんのときどき私は思うよ・・・

—ココカラ、抜け出シタイ……—

狂わせる森

自分でもわかるよ

最近私はどうかしてる

こんなところにいるせいなのか
変な気分になってくる…

徐々にこういう思いも強まってきた

『この森から出たい…』

歩いてても、歩いてても出口はない
どうやったら出られるの…？

原点に戻り、

ワタシはどうやってこの森に入っただろう？

風に連れてこられた？

そんなことってあるのだろうか？

夢なら覚めてほしい…

でも、

そんな願いすら叶わないんだ…

これは現実？

それとも幻？

ここに居続けたら、

ワタシはおかしくなっちゃっよ・・・

——…誰か、助けて…!!——

— …クッククツ …… —
— もうオシマイか？ —
— 人間ってのはいつ見ても、 もろい生き物だなあ …… —

『罪人』の逝く道

はやくここから出たい！

この森から抜け出したい！

ここから出られるならなんでもする！どこでもいい！

この森以外だったらどこでもいい！！

いつしか私は泣きながら走っていた

もうダメだ…

こんなところから早く出ないと

精神がいかれてしまう…！

― たすけて… たすけて！…… タスケテ！！！！

『私が助けてあげるよ』

後ろを向くと、私と同じ年ぐらいの女の子が立っていた

『ここから出たいんでしょ？私が案内してあげるよ』

そういつて手を差し出してきた

私は構わず手を握りしめて泣きながら言った

「お願い！ここから出して！！！」

『いいよ』

その子はそう言ったが、

顔が見えない…

それでも私はついて行った

少しホッとしたのかもしれない

ワタシと同じようにここに訪れた人がいたのだから

「あなたは誰なの？」

『さあね。それじゃあ訊くけど、あなたこそ誰なの？』

「・・・」

答えられるわけない

何もかも忘れてしまったのだから

自分の名前すら覚えてない…

『ほらね。自分のこともわからないんですよ』

私は黙ってうなずいた

顔は見えなかったけど

彼女は不敵な笑みをしていたような気がする

なんだろう？

私は黙ってついていながら考え事をしていた
彼女の事を私は知っているような気がする

聞き覚えのあるような声……

『着いたよ』

前を見ると出口のような光が見えた

私はやっと森から出れると思い、そこに向かって走った

が、

いったんそこで立ち止まった

後ろを振り向いて彼女に言った

「あなたは出ないの？」

『私はここから出ない。あなたは出たいんでしょう？はやくそこに飛び込みなよ』

「・・・」

そうか…

そうだったんだ……

私はやっと全部思い出した
そうすると彼女の顔も見えた

見ると彼女は『血』だらけ
顔も体も『真っ赤』だった

私も自身の体をよく見た

それはやはり最初に思った通り、

『血』だ

これはあの子の血なんだ
あれはワタシの『罪』だったんだ・・・

――迎えに来たのか・・・

きつとこの光の中はこの『あやまちの森』の出口

そして、

『死』への入り口

私はそう思っても、
そう知っていても、
この光の中に

――飛び込みます……

……グシャ……

——バカな人間だな、こうもだまされるとは——
——オレがお前の『罪』に化けてただけなのに……——

——…クツクツク……——
——これだから人間は見てても飽きない……——

——さて、次の犠牲者はだれかな？クツクツク……——

エピソード

ーヒューー……

『“風”の音…また来やがったか…』

スタツ

「またとは何さ！」

森に現れたのは女の子
名は“フウ”

『フン！オレはテメーがでえっ嫌いだ！』

「ひどいなあ…。にしても、やり方もひどい…」

『オレはこのバカな人間どもに裁きを与えているだけだ。お前ら
“神”みたいにあまっちょろいことはしねーよ』

「・・・」

このフウを嫌う者には名が無い
いわば、この森の番人といったところである

「でもひどいよ。人間だって生きてるんだから、許そうよ」

『罪を犯した者は罰を受けるんだ！それが当たり前。お前ら神はその罪を軽々と許しやがって…』

「それがボクらのやり方だよ。誰だって罪は犯すよ！」

『オレが裁いてるのは！そんじょそこらの軽い罪じゃねえ…。命を奪ったという、重い罪だ…』

お前もそんな愚かな人間と友達になるなんて止めちまえよ』

「……。それはやめられないよ…。人間と友達になるのがボクの夢だからね。

君もこんなことやめなよ」

『これがオレの唯一のやれることだからな。人間を死へ迷い込ませてやるのがオレの役目だ！

…そつえば今回ここに迷い込んだ女、お前のせいでここに来たんじゃねえか』

番人はにやりとイヤミつたらしく笑っていた

確かに今回迷い込んできた女は“風に連れられた”と言っていた

「ボクは、危険を知らせようと思ったただけなのに…」

『そのせいであの人間はここに来て、ここで！死んだ！！お前のせいでな…！

ハッハッハ！人間の罪を許す者が死へと追いやるとはな〜♪
こんなに愉快なことばねえぜ！ハッハッハ……！』

番人はバカにするように笑い続けた
フウは立ち上がった

『もう行くのか？ハッ！とつと行っちまえ！』

そう言われても、フウは気にもせず、番人に向かって言った

「人間は確かに愚かかもしれないよ……」

『認めたか……』

「でも！それでも私は人間が大好きだ！」

番人の言葉を遮り、フウは自分の思いをぶつけるように言った

—ヒューー……

フウは森から出て行った

『ハッ！……オレはテメーがでえッ嫌いだ！……人間はバカで愚かな生き物だ……！』

番人はフウの名すら言ったことはなかった

フウも人間も嫌いな『森の番人』

そして、

人間を裁く、『地獄への案内人』……

“命”の研究

時はさかのぼり、それはまだボクが“冷酷”などと言われていた頃のこと。

“冷酷のフウ”などと言われ、誰とも接そうとはしなかったけど、やっぱり友達が欲しかったボクは“命”をつくる研究をした。

不幸がついてしまった頃からは部屋に引きこもり、ずっと本や研究書とかとにらめっこをしていた。
そして、命のでき方からまず学んだ。

初めて知ったことばかりで大変だったけど、あきらめようとはしなかった。

「私たちヒトと人間は体の構造こそはそっくりだが、命のでき方は一緒ではないのだな……」

人間の場合、男性と女性にそれぞれの子を産むために必要な“卵子”と“精子”というものが体内に存在し、それらが結びつかないと子供はできないという。

ボクたち神^{ヒト}の場合は、人間と同様、女性の腹の中から子ができるの

だが、結び方は違っていた。

神には人間のような“卵子”や“精子”などというものはなかった。

「人間と同じようにつくってしまったたら人間になってしまいうからこの方法はやめておこう・・・」

ボクは部屋に引きこもっているのはいいことに、“命”についての勉強を続けた。

エネルギー

人間とはちがうボク達神は、女性が念じるだけで命ができる。それが女性の中で徐々に大きくなり、大きな生命体へと成長する。そして子供ができる…

そんなことしたらボクの体の中に命ができちゃうから、その方法はとりあえず保留。

でもこの方法を少し改造すればうまくいくかもしれない…

そう思ったボクはこの方法をもっと詳しく調べてみた。命ができるようにと念じると、それが“エネルギー”という塊になるらしい。

このエネルギー体が体の中にできるなら、それを外に出してやって成長させればうまくいくかも…

それをボクは試してみた。

大きな入れ物を用意して、ボクの血を少量入れた。血を分けることで命の型かたというものができるといい。あとは“命”をつくるために必要なエネルギーを外にできるように念じるだけ。

けど…

——失敗したらどうしよう……——

恐怖心

『失敗したらどうなるのか…』

そんなことも考えたけどボクはそんな気持ちを振り払い、念じた。

―ちゃんとできるだろうか？

―生まれてきたら、私と仲良くしてくれるだろうか？

―それとも私の不幸でまた傷つけてしまうのだろうか…？

―やっぱりこんな事しない方がいいのだろうか…？

―生まない方がいいのだろうか…？

―私なんかが“命”というものをつくってはいけないのだろうか…？

何も考えない方がいいと思ったが、次々と不安と恐怖心で気持ちはいつぱいになった。

そんな気持ちを抱きながらも念じ続けた。

すると入れ物の中が光り出した。

とてつもなく大きな光で思わず目をつぶった。

そして光がおさまったと思い、目を開けて入れ物を見ると、ボクは思わず叫んでしまった…

「い……いやああああ……！」

その声を聞きつけ、“セリル”というボクのお世話係が部屋に入ってきた。

「フウ様、どうしました!？」

セリちゃんはボクの近くに寄ってきたけど、ボクは反射的にセリちゃんから離れた。

セリちゃんも傷つけたくなかったから………

つくってしまったモノ

ボクがつくってしまったのは、ボクが思っていたのとはまるで違うものだった……

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」

ボクはベッドの中に入ってずっと謝った。

泣きながらずっと謝り続けた……

入れ物の中には、15cmほどの真つ黒い球状のようなものがあった。

そして、

……ひん曲つた黒い腕のようなものが一本、その球体から飛び出ているのが見えた。

ボクはいつの間にか寝てしまっていた。

気がついて机の上を見ると入れ物は消えてあり、代わりにセリちゃんからの置手紙があった

『これは私が保管しておきます。フウ様は気になさらないでください』

短い文章だった。

でもそれは、あの時のボクにとってはうれしかったのかもしれない。

ボクに、この事を訊こうとしなかったのだから。

そしてボクは思った。

—これはボクへの警告

ボクが友達なんて作ったら、いまの様なひどい目に遭うぞという警告。

ボクはもう犠牲者を出したくなかった…
だからボクは誓った。

—今度こそ、ずっと“ひとり”になろう……—

素直な気持ち

何日か経ったある日、それはボクの誕生日。

その日やってきたライちゃんボクの運命を変えてくれた。
そして、教えてくれた。

——ボクは“ひとり”じゃなくてもいいんだ——

その日、ボクはもう一度、命をつくり直そう思った。

セリちゃんから“あの”入れ物を受け取った。

“あれ”は“あの時”と同じままで、黒い球体があり、一本の小さな腕が覗いている。
生きているか、生きていないかは分からないけど、なんとか“この子”を助けてあげたかった。

あの時ボクはこれが怖いと思った。
けど今は違う。

この子を助けてあげようという思いが高まっていた。

ボクのせいでこうなってしまったのだから…

そしてボクは気づいた。

あの時失敗したのはボクへの警告ではなく、ボクの“思い”から失敗を招いたという事を。

あの時ボクは、

『失敗したらどうしよう……』

『ボクがこんな事をしない方がいいのか……？』

など、不安定な気持ちを抱いたままつくってしまった……

——もっと正直にいればよかったんだ……—

——もっと素直な気持ちでいればよかったんだ……—

ボクは部屋に戻って入れ物を机に置き、その黒い物体に語りかけた。

「大丈夫だよ、君は私が助ける。だからもう安心して、今度こそうまくやるから………」

温かな光

「大丈夫だよ」

ボクはそうやさしく言い、目をつぶって念じ始めた。

今度はちゃんと、正直でまっすぐな気持ちで…

すると、黒い物体は光り出した。それは“あの時”のように…

でも、今度の光はあの時と違った。

その光はとても温かった。

目をつぶっていてもわかるくらい、とても温かった…

もういいかと思い目を開けると、入れ物の中には黒い物体ではなく、れっきとした“生物”がいた。

——今度こそちゃんと成功したんだ——

その子は全長約30cmで、透き通るようなきれいな白い体。

ウサギのような大きい耳のようなものがあり、目はかわいらしい小さな点。

頭のほうが体よりも大きく、手や足は小さかった。

そして背中には小さな天使のような羽が生えていた。

“黒い物体”ではなく、その逆の“白い生物”だった。

ヒウウ

ボクは思わずその子を抱きしめた。
いろんな気持ちが混ざっていたけど、一番の気持ちはやっぱり謝罪だった。

「ごめんね…！ごめんね…！」

その子は少しびっくりしていた。
それでもい。ボクはただ謝りたかった。

あんな黒い物体にさせてしまった事。
この子を放っておいてしまった事。
この子を怖がってしまった事。
すべてに対して謝らないといけないと思った。

ボクは泣きながら謝った。
ずっと、ずっと…

そして、その子が話しかけてくれた

「大丈夫ですよ。そんなに泣かないでください。逆に感謝している
ほどなんですよ？わたしをちゃんと生んでくれたのですから」

その子は笑っていた。

しゃべってびつくりしたけど、ボクも笑った。

許してくれたのが嬉しかった。

それでも、ボクはこの子をあんなひどい目にあわせてしまったのは事実。

せめて、この子を幸せにしてあげようと思った。

「私の名前はフウ。君の名前は？」

「わたしに名前はありません。フウ様がつけてください」

ボクは名前なんて考えてなかったから戸惑った。

（何がいいかな……？）

「私が“フウ”だから……フ……フウ……ヒュ……ヒウ……！
よし！君の名前は“ヒウウ”！これでいいかな？」

「“ヒウウ”……はい！気に入りました！」

ヒウウはとてもうれしそうな顔をしていた。
ボクもうれしくなった。

「よろしくね。ヒウウ！」

「はい！フウ様」

ヒウウ（後書き）

「ヒウウ」の読み方、けっこう間違いやすいです。

「ヒュ」ではないのです。

言い方としては、「ヒウウ」と、3字で言う感じです。

真ん中の「ウ」を少し控え目にして、「ヒウウ」と呼びます。

第二の部屋（前書き）

めちやくちや久しぶりの投稿のクセに、めちやくちや短いです。
追加設定的な物です…。

第二の部屋

「よし、できた！」

それは、フウがヒウウをつくり出した数日後。

そこはフウの家を入った大広間から、まっすぐ進み、階段を上がった2階。

目の前には少し大きめの扉。その扉を開け、フウとヒウウは中に入った。

部屋の中はけっこう広めで、フウの部屋の何倍かはあった。と言っても、フウの部屋は若干普通より小さいが…

「…ちょっと…広いんじゃないですか？」

「…うん…私もそう思う…。でも、使えない事は無いから、大丈夫だろう」

「そ、そう、ですね…」

ここは、フウがヒウウのためにと新たに造り出した部屋。そして今日からここがヒウウの部屋となった。

「…やはり、広いです…私1人にはもったいないです」

「そうか…。じゃあ、この部屋を第二の私の部屋としよう！長い階段を渡らなくてすむからね！」

「それがいいです！一緒に使いましょう！」

「うん！」

というわけで、フウの第二の部屋ともなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7717o/>

世界を渡るヒト

2011年10月7日05時24分発行